

朝日ジャーナルの時代

1959

1992

世相
ウー・マンリフ
連合赤軍
ソ連崩壊
幸福の科学
田中金脈
ベトナム戦争
文化

本
三島由紀夫
複合汚染リクルート事件
ケネディ暗殺
JAPANS NO.1
長島引退
ポストモダン

科学

経済
金共闘
日本列島改造論
ドルショック
湾岸戦争
ヒートアップ
月給2倍論
世界
美空ひばり
ロッキード事件
かみ21面相
60年安保
三里塚闘争
ジョン・レノン
ベルリンの壁
靈感商法
思想

朝日ジャーナルの時代 1959…1992

朝日ジャーナルの時代 | 1959...1992

一九九三年四月一日第一刷発行

定価は表紙に表示してあります。

発行人

及川武宣

編集人

宮本貢

編集協力

中川六平
武者孝幸
盛田真史

資料提供

加藤良一

デザインレイアウト

中垣信夫
岩瀬聡
中垣デザイン事務所

印刷所

大日本印刷株式会社

発行所

朝日新聞社

東京都中央区築地五―三―二 千〇四―二
電話〇三―三五四五―〇三三(代表)
編集―書籍第三編集室 販売―出版販売部 振替 東京〇―七三〇

©ASAHI SHIMBUN 1993 Printed in Japan

目次

C O N T E N T S

1959

0001	風速計「能ある鷹」
0002	特派員からの手紙(ワシントン・ロンドン・モスクワ・ボン)
0006	経済インタビュー「体質改善論はおかしい」下村治
0008	経済インタビュー「下村氏に反論する」吉野俊彦
0010	経済インタビュー「吉野氏に反論する」下村治
0012	勃興期にある日本経済 池田勇人
	『所得倍増』論をめぐって都留重人氏の批判に答える
0014	「座談会」現代はいかなる時代か
	敗戦15年の時点に立つて都留重人・丸山真男・加藤周一
0024	裁判批判を批判する 田中耕太郎
0032	安保改定・八つの疑問 安保問題研究会・青野季吉他
	藤山外務大臣への質問書 全文
0040	安保問題への所信 公開質問状に対する回答 藤山愛一郎
0048	明らかにされた安保問題の争点 宮沢俊義
0051	「随筆」荷風の死 山本健吉
0052	全学連の論理と行動 唐牛健太郎

1960...1964

0060	国内・国際政局への私の所信 石橋湛山氏にきく
0065	変則国会・政治部記者のメモから(一)
	鉄条網のなかの政治 遠藤剛介・柳東一郎
0070	6・4闘争の街頭に立ちて 竹内好
0073	議会政治の危機に発言する 東大全学教官研究集会から
	強行採決と憲法 伊藤正己
	この事態の政治的問題点 丸山真男
0084	変則国会・政治部記者のメモから(二)
	空転する政界 遠藤剛介・柳東一郎
0088	ハガチー氏を迎えた羽田デモ 目的意識を失った集団 江藤淳
0092	変則国会・政治部記者のメモから(三)
	デモに包まれた岸政権 遠藤剛介・柳東一郎
0094	6・15事件流血の渦中から 藤田省三
	この目で見た警察権力の暴力
0098	民主政治の擁護を訴う
	民主主義国の常識 大内兵衛
	平和か戦争か 南原繁
	議会主義を守るために 宮沢俊義
	民主政治家の責任 我妻栄

1965…1969

6・15流血事件の記録

本誌調査による事件当日の復元図

0106 『6・15流血事件』をめぐってその反論と目撃事実の寄稿

0124 「対談」誤解されつばなしの「美」小林秀雄・江藤淳

0132 ある「美学散步」的対話

0138 東京の構造改革計画「あすの1000万都市に備えて」丹下健三

0143 言論の自由に国民的自覚を「自壊の危険性はらむ社会」阿部知二

0146 九〇年後——パリ・コミユヌの跡を歩いて「大佛次郎

0152 本『海上の道』柳田国男・梅棹忠夫

0154 「座談会」明治・大正・昭和・三代の文学・人間・社会

正宗白鳥・広津和郎・小林秀雄・高見順

0167 吉川英治氏の死「山本健吉

0168 本『佐藤春夫論』中村光夫・三島由紀夫

0170 「対談」前衛芸術はどこへ行く「ジョン・ケージ・堀田善衛

0176 東四十二番街の空想キューバ危機のあとさき「田中慎次郎

0186 本『ばく自身のための広告』N・メイラー「三島由紀夫

0187 風速計「ヒズミの是正」

0188 「座談会」ケネディ暗殺後のアメリカ

小幡操・松本重治・斎藤眞・坂本義和

0198 白土三平の漫画「発想忍考——社会矛盾の裁断者」佐藤忠男

0202 本『砂の上の植物群』吉行淳之介「石原慎太郎

0203 飢えて死ぬ子供の前にて文学は有効か？「大江健三郎
サルトルをめぐる文学論争

0210 「座談会」期待される人間像」を論評する

中教審の中間草案をめぐって

0219 上原専祿・高坂正顕・海後宗臣・伊藤昇

ベトナム戦争と各国の論調「梶谷善久

0228 現代語感「未練」花田清輝

0232 本「言語にとって美とはなにか」吉本隆明「江藤淳

0234 時の動き「消息絶つたケバラ工業相」

0236 アメリカの10代文化とG O G O 邦正美

0240 「座談会」戦後思想とはなにか

加藤周一・日高普・江藤淳・見田宗介・判沢弘

0251 経済インタビュー「会社の冗費節約法」土光敏夫

0254 ベトナムと日本人「解放民族戦線からの手紙」岡村昭彦

0259 東京からの忠告「わが「平連」アピールに力を「開高健

0266 アメリカの反戦歌「宮本陽吉

キャンパスから街頭へ

0272 本「高見順日記」平野謙

0274 米大使館前にすわりこむまで「反戦の非暴力直接行動」鶴見俊輔

0280 自分のなかのベトナム「作家の内面」井上光晴

0288 知識人の役割「J・P・サルトル

0302 「対談」技術時代と思想「日本とヨーロッパ」武田泰淳・森有正

0311 銀行経営のあり方「設備投資もほどほどに」田実渉

0314 民族教育を求める朝鮮人の心「金達寿

0318 「現地ルポ」南ベトナムの被害者たち「本多勝一

0326 今週の社会観察「ニスカート」

0328 原理運動の学生たち

それは、いまの社会・教育体制が生んだ模範生だ 宇佐美承

0334 「特集」羽田の流血

背景の論理と心情 高橋徹

死んだ学生への想像力 大江健三郎

0343 今週の社会観察「ベ平連のデモ」

今週の社会観察「タレント候補」

0346 四人の米脱走兵

四人と私と「有志」小田実

0352 「特集」流血の佐世保 阻止行動の生んだ連帯と断絶 編集部

0363 「特集」死の行進としての自然破壊

生物循環のなかの人間 吉良龍夫

歌わぬ自然 若月俊一

創造源の喪失 鈴木亨

0376 今週の社会観察「新宿駅西口の市民」

0378 「特集」現代の青春 実存をかけた問い

美しくみじめな季節 柴田翔

まず、虚構のなかに母親を殺せ 鈴木志郎康

0388 経済週報「日本列島改造案」を批判する 野口雄一郎

0393 社会観察「ハプニングの町・新宿」

0395 「インタビュー」乗用車自由化論に反対する 川又克二

0398 「座談会」われわれは、なぜ、安田講堂を占拠するか

東大大学院生、助手の有志は発言する

0406 本「都市の論理」羽仁五郎 倉田令二郎

0408 「特集」セックスの今日的状況

体制の侍女としての性 なたい なた

ゲリラに出てゆく朝 斎藤竜風

エロス、性を超えるもの 澁澤龍彦

0424 現代の偶像「吉本隆明」 粟津則雄

0430 「特集」国際反戦行動デー

若い力が演じた新宿ハプニング 編集部

0441 騒乱罪適用に疑義 藤本英雄

「特集」主席選にあらわれた沖縄のこころ

われわれは「即時」を選んだ 大田昌秀

0444 現代の偶像「大江健三郎」 柴田翔

0453 入試強行へなだれ込む東大

あえてノンセクト・ラジカルに 菊地昌典

0459 東大闘争と知識人 梅本克己

0461 社会観察「安田トリデの攻防」

0464 現代の偶像「ビートルズ」 横尾忠則

0468 社会観察「花咲ける機動隊武士道」

0475 全国大学紛争の現状

0482 攻撃的知性の復権 山本義隆

一研究者としての発言

0483 教授会の少数意見

孤立の憂愁を甘受す 高橋和巳

0490 君は敵だったのか 原卓也

0498 社会観察「反戦フオークに戒厳令」

0500 自己否定のあとに来るもの 最首悟

0507 山本義隆・滝沢克己往復書簡 山本義隆・滝沢克己

0528 秋田日大全共闘議長獄中日記 秋田明大

0537 風速計「シロシロの秋」

0538 本「夢野久作全集」 澁澤龍彦

1970...1974

- 0640 “安田磐落城”一周年
東大闘争の現代史的意義 廣松渉
- 0647 社会觀察「機動隊の罪業」
資料・警察官不当検問事件調査報告書(抜粋)
- 0652 平均的戦後デマゴグ・中曾根康弘・前田康博
大衆社会状況に適合した中距離射程の先見性
- 0660 戦後行動的知識人の終焉 清水幾太郎の思想と行動 竹内成明
内ゲバ―悲痛な必然と人はいうが…
何を革命するのか 党派の論理と革命の論理 梅本克己
0668 「座談会」個と組織のはざまに ないない 中島誠ほか
0672 “入管法”を前に朝鮮人問題を考える
0678 国籍書換えに見る日本人の驕り 山田恒史
- 0684 「緊急特集」三島美学の死
錯誤にみちた文学・政治の短絡 野間宏
お静かに眠りください ないない
- 0688 三島ロマンチズムの自己崩壊 虚構と錯誤の文化防衛論 真継伸彦
0696 三島の死とその象徴
いたかっただらうな 筒井康隆
- 0698 「特集」狂気と社会
「対談」歴史のなかの狂と死 司馬遼太郎・鶴見俊輔
0698 狂気が切り拓くもの 飛鳥井雅道
0694 死民たちの春に ぼん奈落 石牟礼道子
- 0698 「特集」大学の冬―去るも残るも
「ルポ」運動の沈潜と多角化 編集部
- 0697 三里塚―土にかじりつく闘魂 決戦迫る北総台地の熱気 山田恒史
何を滅ぼして空港をつくるのか 土のトリデで一日をすべし 前田俊彦 0691

- 0694 社会觀察「京浜安保共闘のナゾ」
- 0697 「朝日ジャーナル」回収号・表紙と目次
- 0699 櫻画報 赤瀬川原平
ウーマンリブを洗い直す
0642 「座談会」日本のリブをめぐるもの
伊藤雅子・駒野陽子・田中美津・岡真樹子・樋口恵子・矢内直
新たな大衆暴力路線への道 滝田修
- 0649 シン・ポジウム・爆発した国際通貨危機
世界経済における「戦後」の終り
関寛治・長洲二・野口雄一郎・森田桐郎
- 0654 「対談」現代のニヒリズム 内村剛介・五木寛之
笑気・狂気「ガンバラナクッチャ」
0666 旅を捨てよ、家に居よう…… 安田南
- 0682 「対談」アジアを歩きながら考える 加藤祐三・鶴見良行
0687 「座談会」人間・革命・肅清 連合赤軍事件の意味するもの
0694 菊地昌典・ないない 前田俊彦・見田宗介・森恭三
0708 奇怪な保守 連立政権 田中総裁誕生劇をみる 石川真澄
0712 ルバング島の兵士たち 大岡昇平
- 0716 複製時代の「表現」とはなにか
「マッド・アモノ」白川義員裁判」をめぐって 中平卓馬
- 0720 「対談」わがベトナム体験の総決算 本多勝一・小田実
0736 大佛次郎―その生涯と作品 飛鳥井雅道
0739 風速計「スッパ抜き」
- 0740 「特集」違憲の軍隊 司法の健在示した長沼判決 伊達秋雄
0745 「特集」少数者―画一化に抗するもの
神は細部に宿りたまう 久野収
- 0752 「長い冬は過ぎつつある」韓国地下運動組織からの声明文
大塩清之助「解説」

0758 縛られるテレビ「いま何が起っている？」田原総一郎

0763 「座談会」ヒーロー考現学

「背番号3」が消えるとき 神田順治・鈴木武樹・中田耕治・真継伸彦

0770 「特集」田中退陣

新しい連合の時代 塩口喜乙

0775 金権を排す 市川房枝

0829 ロッキード疑獄「特集」

永久政権についての限界が見えた「保守腐敗構造の破産」富森徹見
田中軍団——この厚顔 奇怪な構造 編集部

0836 「特集」毛沢東 人・思想・革命

毛沢東体制は解体する 中嶋嶺雄

第三世界における栄光と挫折 北沢洋子

0847 本「死霊」塩谷雄高・澁澤龍彦

0850 「特集」ロッキード社会の内的系譜

「対談」現代日本の自画像 いだもも・加藤周一

0860 制服犯罪者の喜劇 種村季弘

0866 「座談会」ナチユラルな女 野坂昭如・高橋たか子・道下匡子

0876 「座談会」ニュース・キャスター論

「肉声」ことばの危険と魅力 磯村尚徳・大島渚・田原総一郎

0884 「特集」漫画 突出した笑いはアホな気力で創られるのだ 赤塚不二夫

0886 「インタビュー」三里塚の闘いは新しい長期戦に入った 戸村一作

0890 たかりの構造と自立の思想 伊東光晴

0898 暮らしの旗 高く掲げて 花森安治さんの人と活動 扇谷正造

0900 玩物草紙「ホルノ」澁澤龍彦

0902 現代史への証言 朝日ジャーナル1000号に思う 森恭三

0905 「対談」遺伝子工学にタブーはないのか
「ゴビー人間」と科学の未来 磯野直秀・筑波常治

0912 「極点」ルームランナーの孤独 寺山修司

0913 いま、女が働くということ 女子大生にとつて就職とは？ 中島通子

0917 田中清玄氏が語る「日本の戦後を駄目にした人脈」 高瀬昭治

0924 岐路に立つ日本の思想状況 知と思考の新生を求めて 村上陽一郎

「Japan as Noli」?

0930 「対談」日本讃歌の危ない落とし穴 エズラ・F・ボージェル・永井道雄

1975...1979

0778 「特集」新宿はだれの都市か

あゝ無情 無頼の街 小川特明

0785 あいまいさの空間 多木浩二

0790 本「わがルバン島の三〇年戦争」小野田寛郎・安岡章太郎

0793 本「われわれはなぜ映画館にいるのか」小林信彦・植草甚一

0794 「座談会」「複合汚染」に救いはあるか
有吉佐和子・華山謙・星野芳郎

0803 風速計「インフレ商法破綻」

0804 寒村茶話「内ゲバについて」荒畑寒村

0806 「対談」国鉄の再建と労使関係 高本文雄・岩井章

0810 人類は生物の掟を破るか 野間宏

0822 原子力神話は崩壊した 世界に広がる「反原発」の炎 市川定夫

0827 ガールフレンドの弁 寒村茶話を読んで 瀬戸内晴美

1980...1984

- 0929 苦しいのだが、生活水準を下げるしかあるまい「宇井純
国際消費者セミナーにおける感想」
- 0934 不確かな現代風景の中の最後の砦「谷川健一
「地名を守る」運動の現状に思う」
- 0939 わが文明論的人口・食糧論中尾佐助
- 0953 思想と潮流「なぜ そばは東 うどんは西」宮本常一
- 0956 日本の生きる道「都留重人」
- 0964 「平和憲法」と「人間尊重」を柱にして
壁抜け男の社会学「読者の構造的性について」寺山修司
- 0968 いま、新聞への信頼感は……
人類であることを実感するコミュニケーションを「福田定良」
- 0974 現代文明の鬼つ子「核廢物」樋田敦
- 0980 ジョン・レノンの死「希望なき時代の始まり」山川健一
- 0984 「婦選」の二字を掲げつづけた意味「市川房枝の生と死」鹿野政直
- 0986 「金八先生」なんているわけない？「村上義雄
いらだつ教師・親そして子ども」
- 0992 荒畑寒村、最期のメッセージ
「これだけは言っておきたかった」聞き手・堀切利高
- 0996 論争「ツービート」は危険な兆候か「鶴見俊輔・鎌田慧・佐藤忠男」
- 1004 **憲法討論**
「なによりも国際情勢の現実を直視せよ」江藤淳
「九条は保守党政府にとつての救いの神だ」色川大吉
- 1016 ひとり生まれて、ひとり死す……「故吉野源三郎氏に寄せて」中野好夫
- 1018 「学校」を笑え！「ファシスト」を笑え！森毅
- 1022 「環東シナ海」文化圏の創造をめざす「谷川雁
倭とエゾの復権に沿って」

- 1028 「座談会」われらが旅路に果てはなし「真野毅・谷川徹三・高橋正雄
「老いの輝き」からのメッセージ」
- 1034 夫は英霊ではない「自衛官合祀拒否の妻の二〇年」田中伸尚
- 1038 学園祭人気講師とテーマ「この10年
安易で無責任な「若者論」の典型！」
- 1040 「京大新聞」が本欄批判を大展開
- 1041 ナカソネ政権の何が一番危険なのか「前田康博
大手を振る「社会を忘れた政治」」
- 1044 小林秀雄の死「価値観素乱の現代から見据える」中上健次
- 1046 「座談会」
ケインズは本当に「死んだ」のか「伊東光晴・佐和隆光・中村達也
「片手落ち」的はずれ」の批判を排す
エレクトロニクスに乗った「詩心」
- 1053 **東京デイズニールランド探訪**「飯沢匡」
- 1056 「自由回路」「進歩」に幻滅を感じる資格「堤清二」
- 1058 「対談」「男性社会」を突き崩せるか「落合恵子・山本哲士
性差別の根源と行方を探る」
- 1064 知の全域を足早に横断し去った「寺山修司」「三浦雅士
人を脅かす過激な問いを問いつづけて……」
- 1066 「自由回路」国を守る方法としての憲法九条「ダグラス・ラミス」
- 1067 「自由回路」性差別をめぐる不毛な応酬「上野千鶴子」
- 1068 **「討論」時代に向かって**
「ちよつとピンボケ」でありたい
戦後生まれが目指す「わが未来」三田誠広・土屋恵一郎・浅田彰
- 1075 「多事争論」ザ・浅田彰Ⅱ「座」Ⅱヒストロ説「筑紫哲也
いつまで浮かっている気なのか「國弘正雄」
- 1076 日本の「成功」は先が見えた
- 1079 「文化」「ガロ」の二〇〇年

1080 **軍縮と政治倫理なくんば国滅ぶ** 三木武夫

21世紀に向かう日本の針路

1086 ベイトソンの世界

いま、知の構造をゆさぶる精神のエコロジスト 井上ひさし

1090 「インタビュ」非政治的時代のアンガー・ジュマン・ジュリア・クリステヴァ

ニュースインターフェース

1099 正体不明の街頭募金団につきまとう原理運動の影 白井敏男

1103 「対談」かい人21面相 全脅迫状 別役実・朝倉喬司

わしらが あいつらの ファン ということばれてしもたやないか

1142 「ロス疑惑」とマスコミ

慣れつゝになった犯罪報道の異様 宮本真

逮捕前日手記・それでもマスコミに言いたい 三浦和義

1149 「文化」『ヒックリハウス』終刊

1150 **「戦後否定論」を否定する** 宮沢喜一

1158 「対談」僕らのジョン・レノン体験 荒川洋治・松本隆

「主題なき時代」に放り出されて

1163 「多事争論」メディア、第四の誤算？ 筑紫哲也

1164 過去に目を閉じる者は現在に盲目となる R・ワイツゼッカー

五月八日、敗戦四〇周年にあたるの連邦議会での演説

アイデンティティ解体論 ポスト「昭和」と天皇制 小阪修平

1176 ガルシア・マルケスが語る

ラテンアメリカの現実と未来への予感 田村さと子

1186 「対談」ビジネス文明は何を残すか 西部邁・粕谷一希

1985...1989

1110 「ルポ」THE 幹事長室

党高政低を主導する金丸信のすゝみ 鈴木啓一

1114 「追悼」中野好夫「全き人は一氣に動く」を体現 篠田一士

1116 「特集」稀代のバロディスト・宮武外骨が甦る

「対談」過激と滑稽の「世相壊乱術」赤瀬川原平・四方田犬彦
過激本分、面白半分の闊達自在 野坂昭如

「天誅新聞」山崎浩一

「正義新聞」泉麻人

「朝日新聞」中森明夫

1126 **「本誌VS統一教会」の経緯** 編集部

統一教会からの「反論」 坂詰博

1132 吉本・埴谷論争を斬る

もつと阿呆になれ、吉本！「お笑い芸人からのメッセージ」ビートたけし
日本の「繁栄」をどう評価するか 齟齬の表層と基層 呉智英

1142 「ロス疑惑」とマスコミ

慣れつゝになった犯罪報道の異様 宮本真

逮捕前日手記・それでもマスコミに言いたい 三浦和義

1149 「文化」『ヒックリハウス』終刊

1150 **「戦後否定論」を否定する** 宮沢喜一

1158 「対談」僕らのジョン・レノン体験 荒川洋治・松本隆

「主題なき時代」に放り出されて

1163 「多事争論」メディア、第四の誤算？ 筑紫哲也

1164 過去に目を閉じる者は現在に盲目となる R・ワイツゼッカー

五月八日、敗戦四〇周年にあたるの連邦議会での演説

アイデンティティ解体論 ポスト「昭和」と天皇制 小阪修平

1176 ガルシア・マルケスが語る

ラテンアメリカの現実と未来への予感 田村さと子

1186 「対談」ビジネス文明は何を残すか 西部邁・粕谷一希

原発の暴走

「メルトダウン」の衝撃 高木仁三郎

ウクライナの「ザ・デイ・アフター」 広瀬隆

1200 「文化」ボー・ボワール死去 金井淑子

1201 **連合赤軍事件の長い影**

自主性なしに走つた過ち 永田洋子

人道押し潰した極左闘争 坂口弘

豊かな時代が隠し続ける暗い自画像 笠井潔

連合赤軍事件と「いじめ」の問題 植垣康博

1216 永田洋子らの退屈な「反省癖」 島田雅彦

死をどう迎えるか 末期癌とアメリカのホスピス 千葉敦子

1222 「対談」メタファーとしてのエイズ 村上陽一郎・柄谷行人・渡辺雄二

人類の病におびえる単一民族国家の免疫系
指紋押捺拒否した韓国詩人の「留学拒否」 金明植氏に聞く

1229

1232 「座談会」政治の風景が変わる? 「女の選挙収支決算

三井マリ子・向田映子・太田博子・木下明美

1238 テロとジャーナリストの死「朝日新聞阪神支局襲撃事件」鈴木敏

1246 「追悼」千葉敦子さん

死への準備日記・最後のメッセージ「千葉敦子
わが友、ジャーナリスト・アツコへ」村上つ子

1249 「文化」森茉莉の孤独な死「中野翠

1250 「追悼」岸信介

戦前をもちこたえた「偉大な反面教師」内田健三

1254 「連合」の誕生「低迷する労働界のカケ」藤森研・中村謙

1260 「対論」シャッフルする時代へ

ポスト・ポストモダンの戦争・死・ファシズム「浅田彰・村上龍

1266 ミツクの短足ガニマタがカッコよくみえる時「忌野清志郎

1269 桑原武夫先生のご逝去を悼む

たぐいまれな「猛獣使い」を失った淋しさ「梅原猛

1270 政・マスコミ界を汚染する

リクルート商法「西井泰之・西前輝夫

1274 ペレストロイカ「ソ連を吹き抜ける維新の風」新妻義輔

ニュースインターフェース

1279 「9の字」の次は「8の字」でも作つたら「保坂展人

1280 緊迫ドキュメント・天皇の病床「本誌取材班

百恵と聖子の記号論

1284 フォニズムからみた二人のアイドル「小倉千加子

1288 裕仁天皇への訣別

二極対立の時代を生き続けたわたし「大岡昇平

1291 「追悼」大岡昇平の人と文学

足もとを照らす光が失せた……「水上勉
人間を深く愛するひとありて「川村二郎

1295 世界各国は天皇死去を

どう報道したか

1308 ああ、手塚治虫「人類愛と理想主義に生きた大ロマンチスト」佐藤忠男

1312 「緊急インタビュー」君は天安門で何を見たか?!

1314 美空ひばりの死

未成熟の天才は、へ五〇年代への夢の呪縛に生きた「海野弘

1318 崩れ落ちる東欧の「共産党」神話「藤村信

1322 ドイツのうねり 世界史の奔流

国民軍二〇〇年ぶりの撤退「堀田善衛

「座談会」四〇年の悪夢から醒めるドイツ、欧州、そして世界
鹿取泰衛・高橋進・辻邦生

1332 「対談」金ピカ80年代の神話「島田雅彦・鴻上尚史

アイドル商品化の果ての「排外」

1338 「追悼」開高健「おたがい、人間として」小田実

また一人、ベトナムの戦友が逝った「石川文洋

1990…1992

1342 見えてきたアバルトヘイトの崩壊「伊藤正孝

1346 「靈感商法」は終わらない「追いつめられた集金活動の暗部」有田芳生

「インタビュー」心の渴きつく商法は滅びない「山口広

1354 芳賀ゆい伝説「シミュレーション時代の究極のアイドル」山口一臣

終わりの決まった祭り「秋元康

『徒然草』以来の噂文化「宮田登
生身不要という逆説「大塚英志

1358 ゴリ押し「海外派兵」大野拓司・西前輝夫

政治は立憲主義を奪おうとしている「杉原泰雄
国際社会への見せかけだけが先走る「橋爪大三郎

この法律を通すわけにはいかない「山内敏弘

かぎりなく近づく海外派兵への道「前田哲男

「恫喝外交」に引きずられるな「岡野加穂留

恥を忍ぶ道をあえて選べ「石川好

1366 「対談」イミテーション・ゴールド「藤原新也・田中康夫

クスレテイク時代・なにもないコワサ

1373 「対談」この戦争の意味「大前研一・船橋洋一

1382 コンビニエンスな神様たち「新・新宗教研究」有田芳生・江川紹子

1394 「対談」暴走する日本資本主義・論

証券・銀行スキャンダルの「哲学」「岩井克人・関曠野

1400 ロシアの残酷と飛躍「垣谷雄高

1403 トーマス判事のセクシャル・ハラスメント疑惑

「性」を「人種」で分断したアメリカ「外岡秀俊

公聴会の「狂信性」怖かった「福島瑞穂

日本の司法意識考えよう「山崎浩一

1411 「対談」死を巡る「梅原猛・五木寛之

1420 本誌の休刊について「下村満子

1424 「徹底対論」自衛隊のPKO参加

憲法九条は黄昏れているか「小林節・西修・浅井基文・山内敏弘

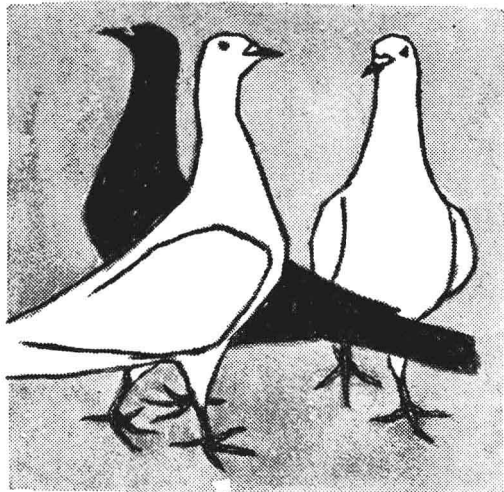
1430 東京は朝の7時「岡崎京子

1437 ●年表

1446 ●主な連載・臨時増刊

1453 ●人名索引

1463 ●事項索引



杉山 翠 絵

そこに誇張が伴いがちである。たとえば、さきにフルシチョフは、社会主義国が現

在でも人口一人あたりにして資本主義諸国の工業生産に追いついている、と言明したが、どのように計算しても、この証明はむずかしい。粗鋼生産は、ソ連圏が現在七千万トと見て世界の四分の一、発電量は三千億キロワットと見て六分の一、原油はせいぜい七分の一、セメントが六分の一といったぐあいであるから、人口に

能ある鷹

フルシチョフをまつまでもなく、社会主義国の工業発展率が高いことは、今で

おいて世界の三分の一を占める社会主義圏が、人口一人あたりで世界平均のレベルに達しているとはいいがたく、ましてや資本主義諸国の平均には及んでいそうもない。

は広く認められている。西欧のアレック・ノーヴという経済学者は、ソ連の工業生産が一九六三年ごろにアメリカの一九五六年水準に達するだろうと予言したことがあるが、英米でも専門家はこの点をあまり疑っていない。むしろ問題は、資本主義国が物価騰貴なしにはなかなか経済拡張をなしえない状態であるのにたいし、社会主義国は成長しながら物価を下げることでさえできるという点である。競争は、物量の大いさにあると同時に、あるいはそれ以上に、国際市場でのねだんにある。たしかに社会主義諸国には経済発展の実力があるのだろうから、むりに肩をいからせないほうがよい。もしも宣伝効果をねらうなら、スプートニク方式のほうが効果的である。

風速計

「能ある鷹は爪をかくす」ということわざがあるが、少なくとも人工衛星打上げにかんしては、ソ連は爪をかくしていた。それに比べると、アメリカには多少あせりの誇示が見うけられる。昨年の暮、アイクの声をのせて地球を回った「アトラス」のばあいなど、最初は四半で世界一という見出しで、アメリカの新聞第一面を飾ったが、まもなく正味の重さは、ソ連の第三スプートニクにはるかに及ばないことが明らかにされ、かえって民間の声は政府の発表を批判したものだ。ところが工業生産となると、ソ連のほうがひけ目を意識しているのか、いこうとに誇張が伴いがちである。たとえば、さきにフルシチョフは、社会主義国が現

朝日ジャーナル

3月15日号

評論

ICBMの生んだ世界的矛盾	10
変質者とその対策	林 謙 38
ある議員の質問	宮沢俊義 68
自己喪失症	武藤絲治 68
文明の暴虐(Ⅰ)	A・ハクスレー 70
〈異議あり〉就職試験日の繰上げ	中屋健一 76
風速計	3

解説

〈時の動き〉

・北鮮帰還の背景	28
・賠償汚職・現地の声	29
・総理府に地主制の亡霊	31
・激増するか? 凶悪犯	33
・完全雇用論の波紋	35
〈東から・西から〉	36
〈新聞を読む前に〉 在日朝鮮人の二つの団体	47

報道

〈特派員からの手紙〉

・ワシントン(津島一夫)	4	ロンドン(高垣金三郎)	5
・モスクワ(秦 正流)	6	ボ ン(妹尾 芳郎)	7
東京通信(荒垣秀雄)	8	大阪通信(吉村正 郎)	9
〈新しい国づくり〉	—グラフィア・ページとも—		

海へ伸びる東京……………本誌・横田繁三…20

〈羽田 ロビー〉 米国で好評のショウユ……………秋谷満寿…27

〈文化ジャーナル〉……………

文学・美術・音楽・映画・ステージ・デザイン・マスコミ・教育・科学技術・保健……………

〈村の報告〉「ガスと水道」の嫁入り……………和田傳…77

〈労働レポート〉……………79

連載

〈旅情〉ザグレブの早春……………阿部展也…42

—色グラフィアとも—

〈私の発想法〉作家・松本清張……………62

パナマ事件(第1回)……………大佛次郎…80

〈本一紹介と批評〉……………58

- ・聖書と考古学……………三笠宮崇仁
- ・新時代の序幕への旅(E・スノー)……………梶谷善久
- ・海外雑誌論調……………

〈鑑賞席〉フォンテインの古典バレエ……………

……………(解説) 光吉夏弥…67

グラフィア・ページ(64)

カット 山路真復・野村登雄

ダレスの夢

國務長官になることがジョン・フォスター・ダレス氏の

ワシントン

若いころからの宿望だった、という伝説がある。

もっとも、このほかにも

ダレス氏が「なりたかった」話というのが二つある。

その一つは最近の記者会見で本人が告白したことだが「小さいころは、機関士にあてがれた」そうだ。これを聞いた全米機関士組合からは、さっそく、機関車の模型が届けられ、ダレス氏は機関帽をかぶってエツに入ったものである。もう一つは牧師さんになりたかったという話だが、現に息子のエイブリ君が神職についている。黒衣をつけて、善男善女にカツを入れているダレス氏の図は、國務長官より向いていたかも知れない。これを知っていたかどうかはわからないが、自民党の河野一郎氏もワシントンを訪問したとき、例のダレス的「説得力」を面と受けて「まず名僧という感じだなあ」と述懐していた。

ところで、紅顔のダレス青年を迷わせたのは、すばらしい見

本が二つあったからだといわれている。父親のアレン・メイシー・ダレスは長老派教会の牧師、祖父のジョン・ワットソン・フォスターは一八九二年ハリソン大統領時代の國務長官で、ともに名の聞えたひとだった。



全米機関士組合寄贈の模型を前によろこぶダレス長官

の友人を前に、ためしに國務長官の仕事を書き出してみたら、大まかな分類だけでも十六項目、しかも、その半数が社交と省内の行政事務だと分った。これにはさすがのダレス氏が「わたしがやりたいのは外交だけだ。

ほかの仕事は何かならんだらうか」と長嘆息したという。

この「世界一忙しい仕事」をやりまくって、

世界をとび回ること八十万^キ以上。「國務省すなわちダレス」

のワンマン長官ぶりを発揮したのだから、身体

の方が参るのも無理はない——と、日ごろダレスぎらいの評論家までが、えらくしんみりした論説をかかげている。もっとも、ご本人は「まだまだやめられない」と闘志はなはだお盛んだ。

「タフ」といえば、さきごろ訪米したミコヤン・ソ連第一副首

相も、線の太さでは定評がある。文字通りの「敵地」に乗り込んで微笑と放言で全米を魅了したのだから、たくましさはダレス氏と好一対だった。好敵手の重病をきいて、ミコヤン氏は果してどう感じているか。

揭示板

米國務省の記者室は、茶目気も国際性がある。最近、だれが書いたのか、ここの大揭示板に「売出し」の広告が出た。

もはや不用につき手放したし、という品を書き並べたものだが、これに各国の記者が

ぎつぎつに書き加えていったのでたちまち「一九五九年、不用品リスト」が出来上がった。ご希望の向きは、入札ご随意。

一、ダレス國務長官の署名入り著書「大量報復政策」初版

一、脱腸のきれつばし（新品同然）

一、統一ドイツ自由選挙用の未使用投票用紙

一、ハロルド・スタッセン（前米軍縮代表）

一、パチスタ前キューバ大統領（革命で亡命中）発行のキューバ行旅券

若い世代

ワシントンの一角、ジョージタウンという古い町に、ここではめずらしいコーヒー専門の喫茶店が一軒ある。冬日の淡いある昼下がり、ここで、お茶をのんでいた私は思わず隣のテーブルに聞き耳をたてた。

二十そこそこの、大学生らしい男女の二組がごくまじめに「民主主義の弱点」を論じている。へえ、アメリカでこんな風景にぶつかることもあるのか、と私は感心した。

ことしのはじめに全米青年商工会議所が「一九五八年の青年十傑」を選んだが、著名な政治評論家キッシンジャー氏（35）を年長に、原子力潜水艦ノーチラス号の航海長ジェンクス大尉（31）や一昨年三十歳でウォール・ストリート・ジャーナルの編集長になったウォーレン・フィリップス氏など誇らしくも輝やかしい顔ぶれだった。空のコーヒー茶碗を忘れたような二人を見て、アメリカの力は目立たないところに育っているな、と感じたことだった。

▲津島一夫▼

タイムズ 新聞街フ

リート・ストリートの東のはずれをセント・ポール寺院の壮大ながらゐを左にして、テムズ河のほとりに向って歩いてゆくと、地下鉄のブラックライアーズ駅のちかく、タイムズの古色蒼然たるレンガづくりの四階建てが建っている。屋上には、たよりを運ぶ、ゼウスの使者ヘルメスのつえを白地に描いた旗が、いつもヘンボンとひるがえって、世界でもっとも古い日刊新聞社の一つであることを誇っているかのようなのである。

レイに面会をもとめた。サー・ウィリアムは、端正な容貌と立派な体格の持主で、一見、オトリとした人柄のようだ。

編集方針に話が及ぶと、サー・ウィリアムは早速「タイムズの目的ならびに方針」と題して印刷した小さい一枚の紙を取り出した。少しながいので、おもな点を拾い読みしてみよう。

ニュースの報道には、正しく理解し、客観的であること。

タイムズは記録として、今日の読者だけでなく、一世紀さきの読者に対しても義務を負っていることを認識すること。

タイムズは、独立し、どの政党とも組まず、どんな問題もよく検討し、一般国民の利益の見地から政策の良し悪しを判断する。

一見したところ、どの新聞社の編集綱領にも見られる言葉だが、タイムズの場合は永い年月の体験の結晶であって、借りものの言葉でないこと、それを着実に実行しているところに、大きい違いがあるようだ。

英国新聞の色分け たとえば大ざっぱにいうと、デーリー

・テレグラフ、デーリー・メール、デーリー・エクスプレスが保守党支持、デーリー・ヘラルド、デーリー・ミラーが労働党支持、ニュース・クロニクルが自由党支持、マンチェスター・ガーディアンもや自由党支持という色分けの中で、大新聞

はつきりしないとか、一部のインテリのタイムズ批判にはきびしいものがあるようだ。

しかし、タイムズを小わざにかかえていけば、インテリだと見られることは、今日も相変わらず、タイムズの英国社会の各方面に与える影響は、約二十五



アリンティン・ハウス広場に建つタイムズの社屋

万という発行部数からは想像されないほどに大きいようだ。

立志伝中の主筆 しかしこのようなタイムズの内部に非常にセンセーショナルな事件が起き、しかも、そのニュース・ソ

リスがサー・ウィリアム自身だ

ではタイムズのみがどの政党をとくに支持するということなく独立の立場をとっている。こころにくいまでに、自分のペースを乱さない冷静さは、一面においてお高くとまっているとか、大衆感情と離れているとか、ときには日和見の態度が

ズの外勤記者として出発した。彼の才能と精力的な仕事ぶりは認められて、どんどん昇進し、ついにマンチェスター・ガーディアンの新役となりついでロイター通信の重役、さらにBBC放送の主幹、専務理事を出て、一九五二年、タイムズを出てから四十年ぶりにふたたび主筆として帰った。

タイムズ主筆の英国社会での地位は高く、歴代、オックスフォード、ケンブリッジといった名門の大学出身者に限られていたのが、そのようなアカデミックなコースをたどらなかつた彼の主筆就任は、珍しい立志伝として、フリート・ストリートのみならず英国全土に伝えられたのであった。

このタイムズもいよいよ近く新築工事にとりかかるといふ。英国ジャーナリズムの歴史を象徴するこの古い建物、わたしたちの古い部屋が、姿を消すのも、そろ遠くはないだろう。しかし、新しい近代建築に変わろうとも、タイムズのペースはそう変わりそうにない。

△高垣金三郎△

特派員からの手紙

暖冬

モスクワはこのところずっと暖かい。いやモスクワだけでなく、ソ連全体が今年は例年になく暖かいようだ。もちろん気温は連日「マローズ」(氷点下)である。だから、比較的暖かい国からやってきた外国人にとっては、大変寒いところに違いないが、それでも「思ったよりは」というのが、だれしもの感想のようだ。

モスクワ

事実、この冬は、いわゆる「マローズ」の季節にはいつてから今日まで、気温は大体昼間で零下四―五度、夜半で七―八度から十二―三度。ちよつと寒い感じの日でも昼間零下十二―三度、夜間十七―八度程度で、零下二十度以下に下がった日は数えるほどしかなかった。昨年十二月下旬に、三日ばかり零下十七―八度に下がったのが、この冬の最低記録である。独ソ戦のころは、毎年零下四十度もの日が幾日も続いたのだが、戦後はだんだん暖かになってきたのだそうだ。

今年のモスクワの暖かさは、これまで珍しく風が少ないせい

いでもあるらしい。例年なら、モスクワの冬は冷たいからつ風に吹きさらされて、耳などはとてもあらわにして歩けたものではないという。ところが、この冬の街頭には耳垂れなどして歩いている人はあまりない。鳥



「赤い広場」の片すみ待機する除雪車

積もらない。それにモスクワ市内では、ちよつとでも積もるとたちまち除雪車がとんできて、自動車道などは全くぬぐうようにしてとっていつてしまう。この除雪作業は、もちろん昼も夜も休みなくつづけられている。人道などにはまだいくら

か手労働が残っているが、機械化はかなり進んでいるといえる。除雪車は、前方に積もった雪を道の片側にすくいあげる鋼銑板をとりつけ、車体の下に太い針金の回転ブラッシをとりつけたもので、夏になるとこれらの装具をとりはずし、こんどは散水車としてお目見得するそうである。道の両脇にはきだめられた雪は、別の機械でトラックに積みこまれて、どこかに運びさられていく。雪を積荷として何台ものトラックが走っている光景は、ちよつとした壮観である。

ところで、この「暖冬」だが、モスクワつ子のような都会人は別として、農村ではあまり

歓迎していないとのことである。農民たちは、やはり、どつさり雪が降り積もる本格的な冬が豊作のためによいと考えているらしい。だから、今年のような暖かい冬のことを、かれらは「くさった冬」と呼んでいるという。

芸術座の新作

「平和な経済競争での資本主義との対決」とか、「社会主義から共産主義への漸進的移行」とかの大きなスローガンを掲げて、新しい七カ年計画を審議してきたソ連共産党第二十一回大会は終わった。だが、モスクワの各劇場では、この歴史的党大会にささげた特別記念番組をどこでも引きつづき上演している。このなかでいま最も評判になっているのが、モスクワ芸術座の「第三の悲劇」という新作劇である。レーニン(レニンを主人公とするもので、同芸術座の劇作家N・バゴデーイン氏がさきに書いた「銃をもつ人」、「クレムリンの音楽時計」と合せて、そのレーニン三部作を完成したものである)。

舞台は一九二〇年代のはじめいわゆるネップ(新経済政策)時代のこんとんとした困難な情勢のなかで、党の革命路線を指導してきた晩年のレーニンの「人間」を描きだすが作者のねらいらしい。いくつかの挿話的場面がつなぎ合されて、ひとつのまとまりをもち、話の筋ちとおってはいいるが、この芝居では筋そのものは大して重要な意義をもっていないようである。ロシア共和国の人民俳優B・スミルノフが演ずるレーニンは大変な人気である。新聞の劇評は、演出者M・ケドロフ氏がこれによってモスクワ芸術座の舞台芸術に創造的新生面をひらいたとして激賞している。たしかに、役者たちはみんなうまいし、舞台装置と、諸効果も素晴らしいし、こういふ、「偉い人」がでてくる芝居にしては、かなり成功しているように思われる。だが、それでも、たとえば、病状のかなり悪化したレーニンがしゃべりまくる場面などが気になる。あとと息、といった感じである。

ン 求むドイツ兵 例の

耳障しのある独得の鉄カ
プトを目深にかぶった
ところ、ドイツ兵はいか
にも強そうにみえる。実
際、なかなか強い。米國
がドイツの中立化に反対し、
どうしてもNATO（北大西洋
条約機構）につなぎとめておこ
うとする、一因はここにある。
その「強さ」のゆえに、こんな
話が――。

アルジェリアのFLN（民族
解放戦線）に手を焼くフランス
が、この強たくましいドイツ
青年を、秘かに「買いに」来て
いる、というのだ。大方、マル
セーユかどつかで外人部隊に仕
立てあげ、FLNのはびこるさ
ばくに送り込むのだろう。先だ
っても、連邦議会（下院）で、
ある議員が「その数、およそ一
万五千人」といつていた。西独
金属労組のさきごろの発表によ
ると、「その後、実に六万人」
とある。いずれにしろ、かなり
の数の若者が「買われて」行っ
ていることだけは確かだろう。
仏印での活躍 ドイツ兵が外
人部隊としても、えらく強いと

いうことを、フランスが目にあ
たりに確認したのはインドシナ
戦争のときだという。当時、ド
イツの景気もさほどでなかつ
た。遊んでる若者はこぞって
「買われて」行った。しかも、
みごとに戦った。あのディエン
ビエンフーの戦いで、最後まで
がんばったのは彼らだった、
とはもっぱらの伝説であ
る。

ところで、このインド
シナ戦線の外人部隊には
ドイツ人のほかにアルジ
エリア人もいた。彼らの
相当数は、共産側ホーチ
ミン軍の捕虜になり、恐
らくは中共からソ連を経
て、東独かどこかに送ら
れた。そこで鍛えられ、

こんどはFLNの筋金入りの戦
士となつて、アルジェリアに舞
戻っている、という話もある。
インドシナ歴戦のドイツ兵が再
びアルジェリアに出陣してい
るとすると、さばくどこかで、
かつてのアルジェリア人の戦友
と相まみえることにならぬとも
限らない。

武勇を尊ぶかたぎのある中



アメリカの援助武器を手にする西独の兵隊

東、アラブ諸国の間でも、ドイ
ツ人というものは、評判らし
い。トルコなどには、いまだに
ヒトラ―礼賛をこととしてい
る新聞があるそうだ。そのヒトラ
ーの下で奮戦したナチスの将
軍、将校連が、いまナセル大統
領の軍事顧問、またはエジプト
軍の教官として、たくさんこの

共の将校がFLNのゲリラを指
導しているからだ」と書いて、
アルジェリア当局の怒りにふれ
た。フランス軍がインドシナで
ホーチミン軍にずいぶんいため
つけられたことからして、考え
られないことではない。が、い
ま一つの理由として、FLNが
チェコ製兵器で武装しているこ

とを指摘する人が
ある。恐らくは、
チュニジア経由で
その手に渡るのだ
ろう、という。だ
が、エジプトか
ら、ということだ
って否定し切れな
いのである。

いまもし、エジ
プトがFLNの反
仏闘争を積極的に支援している
とすれば、どうなるのか。エジ
プトには、元ナチスとはいえ、
とにかくドイツ人の軍人教官
がいるはずである。が、FLN
がアルジェリアで相手にしてい
るのは、ドイツ青年の加わっ
ているフランスの外人部隊で
はないのか。それにまた「パリ
――ボン枢軸」も問題である。

以上、主として、ひとつづてに
聞いた話、「強いドイツ兵」を
めぐって、西独とアラブのつな
がりには、こういうややこしい
一面もありそうだ、という話で
ある。真偽のほどは明らかでな
い。

△妹尾 芳郎△